

《書評》

岡村民夫著『柳田国男のスイス―渡欧体験と一国民俗学』

川 森 博 司

一 本書の位置づけ

柳田国男の著作については数多くの研究が蓄積されてきている。その中で評者が本書に注目するのは、国際化の方向へ開けた時期の柳田の著作と生活の実態を実証的に追究することから、柳田の思想と方法の現代における意味とその展開の可能性を探っている点である。

柳田の膨大な著作の中から、未来に向けての可能性を展望していくために必要なものをピックアップし、そして組織化していく作業がいま求められている。日本民俗学の成立を一九三〇年代と見るのが定説であるが、本書が取り扱うのは、その前段階に当たる一九二〇年代である。『柳田国男のスイス』という書名が示すように、柳田は一九二一年から一九二三年にかけて、のべ一八ヶ月あまり、国際連盟の委任統治委員会委員としてスイスのジュネーヴに滞在するとともに、余暇を利用してヨーロッパ各地を旅してまわった。この時期の経験が帰国後にも発展・展開していった様相を本書は丁寧に記述し、その可能性の中心を分析している。

筆者の岡村民夫は、その分析の視点を次のように述べている。

そもそも外国生活とは、単一の結論に収斂するほど単純な事柄ではない。言語も社会も自然も突然一変し、余儀

なくその変化に自分が巻き込まれ、これまでの経験との差異と共通性の計測を、あらゆるレベルで、際限なく行わなければならなくなる。長期にわたる外国生活の体験とは、本人にも把握しかねるくらい多くの互いに異質な襞をもった多様体であり、その襞は、帰国後長い時間をかけて徐々に展開し、影響力を顕すはずだ。(九頁)

一九二三年の帰国後、柳田は一九二四年から一九三二年まで朝日新聞社の編集局顧問兼論説担当として、数多くの論説を執筆するとともに多くの講演をおこなった。この「柳田の朝日新聞社時代の研究は、他の時代のそれに比べると非常に遅れている」(二二二頁)。この時期の柳田は、やがて確立される「狭義の民俗学」には収まらない幅広い話題を扱っている。評者は、この時期の話題の広がり現代において「広義の民俗学」を展開していくうえで重視する必要があると考えているが、本書は、スイス時代の論稿とともに、帰国後に執筆した朝日新聞の論説もあわせて、「国民俗学」とは別の形へも展開しえた未発の可能性を、著者岡村自身のジュネーヴ滞在中の実地調査をふまえ、諸論稿を精密に腑分けしながら、論じている。

本書は、「Ⅰ 風景の地政学」「Ⅱ 言語の地政学」「Ⅲ 新たなる日本へ」の三部から構成されている。「風景の地政学」では、筆者のジュネーヴでの現場検証をふまえて、柳田のスイスでの生活の様相を立体的に浮かび上がらせ、そこで柳田がどのような発想に至ったかが考察される。「言語の地政学」では、言語・民族・国際連盟・植民地主義批判・大陸と島の対照などの主題が論じられる。「新たなる日本へ」においては、帰国後の柳田がスイスでの体験を日本の社会状況の中でどのように展開していき、入り組んだ国際社会の中で日本の役割をどのように位置づけていたのか論じられている。

二 力関係の中の言語

評者の問題意識と大きく重なるのは、「言語の地政学」の「第二章 国際連盟と使用言語問題」「第三章 エスペラント」である。国際連盟での使用言語は、英語とフランス語であった。柳田は、国内的には外国語に堪能であったと評されているが、問題は、ヨーロッパの言語を母語とする環境の中に放り込まれたときに、どれだけ言いたいことが言えたかである。「柳田は英語・フランス語の運用力不足のせいで彼の地で非常に苦しんだということを繰り返し語っている」（二二二頁）。筆者は、柳田が「相当な速度で高度な洋書を読みこなしたことも、蔵書に引かれた傍線や書き込み、彼の文章に散見する的確な要約や批評などから判断できる」（二二九―二三〇頁）としながらも、「外国語を読むことと、聴いたり話したりすることとのあいだには本質的な違いが存在する」（一三〇頁）という視点から、柳田の苦境を推し量っている。

柳田自身、「ジュネーブの思ひ出 初期の委任統治委員会」（一九四六年、『柳田國男全集』第三十一巻）という論稿において「言葉が根本の問題だといふことを、痛切に考へずには居られなかつた」と述懐している。そのような状況の中で、柳田は国際共通語としてのエスペラントの普及に期待をかけた。その状況を筆者は次のように述べている。

日本人は英仏語力の不足のせいで、うまく嘘をつくことさえできない。そして西洋人は相変わらず日本の事情に無知である。だから、エスペラントを通して西洋人と互角に議論したり、日本の事情を西洋人にもっと伝えたりするために、エスペラント運動を盛り上げなければならない、と柳田は説いている。国際連盟に出席する可能性が皆無に等しい遠野の佐々木喜善にエスペラント学習を勧めている点からすると、エスペラントが世界に広まり、国際関係を根本から変えていくことまで望んでいたと考えられる。（二四五―二四六頁）

国際連盟におけるエスペラントの公用語化については、一九二三年の第二回知的協力委員会において、委員長のベルクソンによる「人工的世界語がひろまれば、外国語をまなばなくてよいことになる。そうなれば、だれも外国語をまなびつづけなくなり、国境を越えてたましいを近づける手段がなくなるであろう」というスピーチの影響もあり、その議案が否決された（一六三―一六四頁）。このような英仏語優位のあり方は、西洋列強の政治・経済的な権力にもとづいており、それが「何語で学問をするか」という問題にも結びついていた。そのような点から筆者は「柳田とエスペラントの関わりは思想的課題であることが明白である」（一五〇頁）と述べている。エスペラント公用語化への挫折を含むジュネーヴでの経験を経て、柳田の世界認識に大きな変化が生じたことを、筆者は次のように述べている。

柳田にとって西洋言語は、彼方から貴重な情報や高度な文化を運ぶ魔法の絨毯だった。その牧歌的關係はジュネーヴで終わった。これ以降、柳田は洋書を繙くたびに、言語が国家や民族の力關係に貫かれていること、外国語の教養したいが言語間の不均衡な力關係を發動させ、強化する装置であること、つまり自分自身の学問が日本と西洋の不平等な地政学的關係に不本意ながら加担していることを、強く意識せざるをえなくなった。（一四一頁）

このような意識の変化から、日本回帰がおこなわれ、一国民俗学が成立したというストーリーが語られることが多いが、本書は、その間の一九二〇年代の柳田を、まだ西洋と日本の間で引き裂かれた状況にあつたと捉え、そこから別の可能性を汲み取るべきではないかと主張している。「一九二〇年代の柳田は、ヨーロッパの国境を参照の一つとして、日本についても〈境界〉をめぐる複数的な力關係や交通を凝視していたが、一九三〇年代になると、ヨーロッパを、対照的に異なつた〈同質な島〉として日本を映し出すための鏡に還元してしまうのである」（三三八頁）という見解を筆者は示している。

三 西洋への迂回の意味

欧米体験を経た日本回帰、伝統回帰というストーリーは、近代日本の知識人について、しばしば語られるものであるし、柳田についてもそのような理解が可能である。しかし、一九二〇年代の渡欧体験を内側から見ると、別の柳田の読み方があり、そこに柳田を現代に活かしていく可能性が多く含まれているはずだというのが本書の主張である。このことについては、「Ⅲ 新たな日本へ」の「第六章 予定調和に抗して」に筆者の見解と提言がまとめられている。

これまでの研究では、概して柳田の一九二〇年代は一九三〇年代への準備期として捉えられ、柳田本人も「委任統治委員やら朝日の論説委員など引き受けてしまったせいで、我国固有の民俗学の立ち上げや常民の信仰の考究といった一番大事な使命を果たすのが遅れてしまった」と答えるかもしれないが、「こうした見方を、私は一九三〇年代以降の視点から見た予定調和的なフィクションにすぎないと考える」と筆者は述べている（三五七頁）。そのようなフィクションに対して筆者は、一九二〇年代の柳田の積極的な意義にもっと目を向けるべきだと主張する。なぜなら、「一九二〇年代は、柳田が複雑な世界の表面に、もっとも直接、様々な場所と様相において触れ、痛みと好奇心を覚えながら多元的で振幅に富んだ思考や活動をし、もっとも積極的に社会へはたらきかけた時代である」（三五七―三五八頁）からである。たとえば、一九二五年出版の『海南小記』にまとめられた南島研究も、ジュネーヴ体験を挟んで深められた「海の世界史」についての認識の広がりとその背景にあると筆者は述べている。そこには、郷土史を日本列島全体の地政学につないでいく展望が見られるのである。

筆者は一九二〇年代の柳田国男を検証する意義のひとつとして、「西洋が生み出した権力と知のグローバルな圧力に対する義憤や、慎ましい平和の願いや、生まれ育った環境への愛情が、どうして排他的な自閉に陥ったのか、そうならぬにはどう歩めばよいのかを考える」（二五八頁）ことを挙げている。これはまさに現代に新たな形で引き継が

れねばならない問題である。「排他的な自閉」に陥ることのない「生まれ育った環境への愛」を実現していくためには、どうすればよいのだろうか。そのためには、西洋社会が生み出した「近代の原理」と対話し、より普遍的な原理を身につけていくことが今も必要とされる。加えて、近隣のアジア諸国との相互性をもった対話を何語でおこなうのかという問題にも取り組んでいく必要があるであろう。

本書は、柳田国男についての歴史的・実証的な研究をもとにしながら、そのような現代的な課題へと我々をいざなってくれる。本書の議論をもとにして、よりよい未来を展望するための「広義の民俗学」を構想していくことを、自分自身の課題として評者は受けとめた。

(二〇一三年一月刊、森話社、三九三頁、三六〇〇円＋税)